＜日本税理士会連合会会長賞＞

税金が繋ぐ、兄と私の笑顔のために

いわき市立四倉中学校　３年　矢吹　健真

私には、高校２年生の兄がいる。兄には生まれつき脳に重い障害があり、自力で体を動かしたり、言葉を話したりすることが難しい。そんな兄だが、兄の部屋で大好きな音楽が流れると、車椅子の上で身体を揺らし、心の底から楽しそうに笑顔を浮かべる。その姿は私の自慢であり、我が家にとって、かけがえのない大切な存在だ。そして、そんな兄の日常と笑顔を支えているのが、大きな介護用ベッドや兄の体に合わせた車椅子、特別なご飯である。

兄の日常には常に周囲のサポートと、こうした専門的な設備やリハビリテーションが欠かせないのである。幼い頃の私にとって、それらは、兄の「あたりまえ」の生活であり、その背景でどれほどの費用がかかっているかなど、深く考えたことがなかった。しかし、成長するにつれ、兄が生きるために必要な器具や医療サービスの現実を知ることになった。普通に生活を送るだけでも、想像を超える多額の費用が必要となる。もし、私たち家族だけの力で全てを負担しなければならないとしたら、我が家の生活は、到底成り立たなかっただろう。

そんな私たち家族を救ってくれたのが、国や自治体からの支援、つまり「税金」によるものであった。兄の医療費や介護用品の補助、福祉サービスなどを通して、私たちが途方に暮れることなく笑顔で暮らすことができたのは、間違いなく税金という大きな支えがあったからである。

振り返ってみれば、私は税金を単なる社会の仕組みとしてしか見ていなかった。しかし、社会のどこかで働く誰かの汗や頑張りが、税金となって兄の命を守り、我が家の笑顔を支えてくれていると知った。その事実に私は、感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

この気づきをきっかけに身の回りを見渡すと、「あたりまえ」だと思っていた日常は、多くの税金のおかげで成り立っていた。通い慣れた校舎や教科書、部活動の帰り道を照らす街灯、そして街中にあるスロープやバリアフリートイレ。街中で見られるスロープは、単なるコンクリートの坂道ではない。社会で働く大勢の方々よる「納税」という名の優しさが形になり、兄などの多くの人々が外の世界へ踏み出すための「希望の道」となっていたのである。

私にとって納税は、誰かの命を守り、誰かの暮らしや笑顔を明日へ繋ぐための「未来への架け橋」なのだと思う。まだ中学生である私は、大きな税金を納めているわけではない。しかし、日々の買い物で支払う消費税を通して、私自身もまた誰かを支える社会の一員なのだという強い思いが芽生えた。

私たち家族は、税金に何度も何度も救われた。次は私の番だ。誰もが笑って暮らせる社会を創り、誰か困っている人がいたら、そっと手を差し伸べられる大人になりたいと思う。